

『目からうろこ ミサのあずかり方』 来住英俊神父 女子パウロ会 2006年 800円

ミサの構成

開祭

入祭の歌－司祭の挨拶－回心－あわれみの賛歌－栄光の賛歌－集会祈願

ことばの典礼

第1朗読－答唱詩編－第2朗読－アレルヤ唱－福音朗読－説教－信仰宣言－共同祈願

感謝の典礼

供え物の準備－奉納の歌と奉納行列－パンを供える祈り－ぶどう酒の準備－カリスを供える祈り－清め－奉納祈願

奉献文（感謝の祈り・第2奉献文が用いられることが多い）－叙唱前句－叙唱－感謝の賛歌－記念唱－栄唱－交わりの儀－主の祈り－副文－教会に平和を求める祈り－平和の挨拶－拝領前

の信仰告白－**拝領**－拝領後の感謝－拝領祈願

閉祭

お知らせ－派遣の祝福－閉祭の挨拶－退堂

第1章 会衆が積極的に参加する

・一人ひとりの信者の参加態度が積極的になることが大切です。ミサの一方の主役はキリストですが、もう一方の主役はあなた(会衆)です。

積極的参加とは

1. 背筋を伸ばし、姿勢を正す。
2. 聖書朗読は朗読者を見ながら耳で聴く。
3. 「アーメン」「神に感謝」など、応答は力強くする。

聖堂に着いてからだけではなく、事前に準備することも積極的参加です。

1. ミサの前に、1週間の自分の生活を振り返る時間を持つ。
2. その日のミサで朗読される聖書箇所を、予め読んでおく。
3. 折角時間をかけてミサに与るのだから、エネルギーを出し惜しみしない（ぎりぎりの時間ではなく余裕をもって教会に着き、ミサ後も余韻を大切（ミサでの出来事を振り返る時間を取る）に

する。

第2章 なぜ、ミサに行くのか？

・時間と労力をかけてミサに出かけて参加すること自体が、自分とキリストの関係を表すことになります。

親しい人のお葬式に行くのに、会場が離れていても、式が長くてもブツブツ言わないでしょう。葬式に参加するのは、自分が何かを得るためというよりも、まず自分と故人（その家族）との関係を表明するためからです。そして、そういう気持ちで出席した人は、必ず自分も何かを得ます。「いいお葬式だったわね」ということはあっても「つまらないお葬式だった」とは言いません。

キリストの死と復活を記念するミサに参加することによって、自分が神と共に歩もうとする人間であることを表明します。頭の中だけでなく、実際に時間と労力を使って行動することに深い意味がこめられています。

・ミサ以外に何があるか？

たとえば、困窮している人のために献身的にボランティアをすることは、たしかにキリストとの絆の確認になります。ただ、ふと思いついたときにだけ何かするということだと、絆としては弱いでしょう。また、キリスト御自身との関わりがどこまで深まっているかも未知数です。ミサはキリスト者の生活の中心とも言える大切な典礼です。

第3章 ミサに出かけていく

・家から教会まで

ミサの初めに「開祭の歌」が歌われますが、日常生活からミサへの気持ちの切り替えには、この時間だけでは足りるでしょうか。自分の家から教会までの道のりを、ミサに向けて心を整える時間として使ってはどうか。

また、教会までの道すがら目にする風景を、イエス・キリストが救いをもたらそうとする対象として眺めることもできます。すると、ちょっとしたイライラも気にならなくなります。道行くすべてのものは、神が愛され、キリストがそのために命を与えられた世の姿です。それらを、キリストの目で見つめることは、ミサに与るとてもいい準備でしょう。

・1週間を振り返る

電車やバスに乗っている時間に、この1週間自分は何をしていたかを思い巡らすのもいいでしょう。そうすると、ミサの初めの「回心の祈り」がより意義深くなります。また「回心の祈り」は自分の罪だけでなく、「神様、この1週間にいろいろなことがありましたが、でもこうして今ここに來ています。」という思いを込めて祈ることもできます。

・教会が遠いのも悪くない

教会までの道のりが遠い人の場合、特に家族連れの場合は引率の気苦労もあると思います。けれど、一人の場合、日曜日の人々の行動を観察しながら、キリスト者として教会に向かうアイデンティティを確認することができます。「せっかくの日曜日なのに、わたしは教会に向かっている。みんなも同じ教会を目指している。」という感覚になれます。

第4章 祈りの空間を創造する

・この人たちは祈っている

初めて教会に訪れた人に印象深いことは、親切な応対、分かりやすい説教、美しい聖歌であるかもしれません。しかし、それ以上に「ああ、この人たちは祈っている！」と感じられたとしたら、それが最も印象に残るのではないのでしょうか。神に向かって「本当に祈っている人」になりたいですね。

聖堂全体が、深い祈りの空間になって欲しいと思います。日常生活とは違う空間であることを意識し、自分もその環境に創造的・積極的に参加しましょう。

・「神はおられる」ことを感じさせること

いつもは、自分のことをよくかまってくれるお母さんが、ミサ中は全くかまわってくれない。祭壇に向かって集中している。子どもは、「神様がいる」ことにだんだんと気づいていった。子どもも次第と自分も神様に向かおうという気持ちになっていった。祈りの空間に自分がいたことを後に気づいた。

・「祈りの空間」への積極的参加

：司祭が口にして祈る言葉をよく聴くこと。聴く真剣さの度合いでミサは深まります。

：「集会祈願」のあと司祭が「祈りましょう」と招き、少し間を取ります。その間に、会衆はミサを祝う気持ちと自分の神様への願いを呼び起こします。「全能永遠の、神である父よ、わたしたちの行いがいつもみ旨にかなうよう導いてください。御子キリストのうちにあって豊かな実を結ぶことができますように。聖霊による一致のうちに、あなたとともに神であり、世々とこしえに生き、治められる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」(B年年間3主日) この祈願文、今日のミサの意向・強調されるアクセントをしっかりと聴いて、理解して、会衆は「アーメン」とはっきり応えるのが本来の姿でしょう。

第5章 聖書朗読を聴く

・耳で聴く

聖書朗読を聴く時には「聖書と典礼」のパンフレットをできるだけ見ないで、耳で聴きましょう。神の言葉は、まず語られるものだからです。できれば、朗読者の方を見て聴いてください。また、朗読者は、そのような態度で聴く会衆のことを考えて、しっかり練習してください。

・あらかじめ読んでく

その日の朗読者によって、聴きやすい、聴きとりにくいといった問題があります。それを補う意味でも、またみ言葉を心の深くに響かせる意味でも、あらかじめ朗読箇所を読み、出来れば黙想した上でミサに与ることが理想です。主日の福音箇所の解説（幸田司教の福音のヒント）は、でも閲覧できるので参考にしてください。

・み言葉を味合う

主日の聖書朗読は、3 つありますがまず福音書だけをゆっくり何度も読むことをお勧めします。全部をざっと読むよりも、福音書一つに集中する方が有益だと思います。そして、時間があれば第1朗読の旧約聖書、さらに時間があれば第2朗読のパウロ書などを読むようにするとよいでしょう。具体的な聖書の読み方はレクチオ・ディビナを参考にするといいでしょう。このレクチオ・ディビナの要領で、福音書を3度読むといいでしょう。そうすると、ミサでの朗読を耳と心で聴くことができるようになります。「キリスト御自身が語る」という感覚になれる時もあります。聖書に親しむ感覚も身に付きます。

レクチオ・ディビナの具体的方法

レクチオとはラテン語で「読むこと」という名詞、ディヴナは「聖なる」という形容詞

→レクチオ・ディビナ＝聖なる読書・神的読書

1. ゆっくり読む

レクティオ・ディヴナとは「聖書を非常にゆっくり読むこと」。それが案外難しいので肉体的イメージが助けになります。

2. 反芻する

反芻とは、牛や羊が牧草を口に入れて何度もかみ、一度胃袋に入れて、また口に戻してかみ続けることです。反芻の例えは、歯がゆいほどに時間をかけて、徹底的に自分の霊的栄養とするレクティオ・ディヴナの特徴に当てはまります。しかし、牧草文化に生きていない日本人には別のイメージがわかりやすいかもしれません。

3. 一つ一つのことばに「さわる」ように読む

「さわる」とは、ちゃんと触れるのではなく、手の中に包むように保つという意味です。

例 創世記 1：1～3

初めに、神は天地を創造された。地は混とんであって、闇が深遠の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

「光・・・あれ・・・」と一息で読まない。「光」という言葉の重み・質量、「あれ」という言

葉の手触りを感じられると、自分の人生にあった「光」の体験と照らし合わせられるのではないのでしょうか。言葉から単に情報を引き出すのではなく、愛する人や物に触れる感覚を持つことが聖書に込められる神の愛を受け取る助けになります。言葉では語り尽くせない部分を読み取ろうとします。

4. センテンスを読む

初めに、・・・神は・・・天地を・・・創造・・・された。

ゆっくりとこのセンテンスを読むと、知識ではなく、神がこの世界を創造されたのだという「出来事」に触れる感覚が起こります。また、神がどのような期待を込めて創造のみ業(自然界・人間・被造物の創造)を始められたのかといったことに思いをはせることもできます。

5. すべての言葉にさわる、すべてのセンテンスを読む

聖書をゆっくり読もうと思っても、つい先へ先へと滑っていってしまいます。それは、重要な箇所が来たら留まろうと考えているのに、どこが重要なのか分からないためです。

最初から各駅停車と覚悟を決めて、どの箇所も均等に留まって読むことで、新しいみ言葉との出会いが生まれます。一度これまでの知識を全部ゼロにして、すべての言葉に同じように丁寧にさわることで、新鮮な姿で神の言葉が立ちあがってきます。新聞などから情報を迅速・的確につかむ読み方とは違う態度で読みましょう。神の息吹(聖霊)を感じ、わたしの魂に刻印を残す力がみ言葉には潜んでいます。

6. 何度も読む、行きつ戻りつ読む

レクティオ・ディヴナは、同じ箇所を何度も繰り返して読みます。どこで戻るかは、「なんだか、まだ先に行きたくないな。ちょっと戻ろうか」という心の促しに従えばいいのです。

例：神の霊が（神の霊が）水の面を動いていた（動いていた・・・）。

7. 初めて読むように読む

レクティオ・ディヴナの大敵は、「ああ、あの話ね」という慣れです。有名な箇所は、何度も読んでいたので新鮮さや興味・驚きが薄くなっています。新しい解釈が聞けるかどうかに関心が向きがちです。しかし、今、神様がわたしに何を伝えようとされるのかという視点で、生き生きとした興味を持ってみ言葉に向かうことが大切です。しかし、そういう意識をもてない時のための技法を紹介します。それは、自分で合の手を入れるということです。

「初めに、神は天と地を創造された」と読むとそこに相手の手を入れます。「そうだったんですか！ 初めに神が天と地を創造されたのですか！ 知りませんでした！」としみじみうなずいてください。すると、自分はまだ本当には天地創造の出来事の意味と奥行きを「知らないのではないか？」という感覚がもたげて、改めてこの出来事に向かう姿勢が整ってくるのです。

8. 素手で読む（参考文献に頼らない）

レクティオ・ディヴナをする時には、机の上は清掃して、雑多なものは置かないようにして下さい。読む時の姿勢も整え、通常の時と違う時が始まる意識を持つことが勧められます。また、注釈書などの参考資料に頼らず、わからないところは別の時間に調べる、聖書だけ(素手で)に向かうことが大切です。始める前には、神と出会える期待と意志を確認します。分かち合いをする際にも、知識の量を気にするのではなく、神の霊が働き、自分の心のうちに響いたことを素直に差し出すことが大切です。

一人でする場合（全体で 30 分から 1 時間）

- ①机の上を整理して、聖書だけにする。
- ②小さな声で、選んだ聖書箇所を口に出してできるだけゆっくりと読む。
- ③前半だけを黙読する。
- ④もう一度、全部をゆっくり口に出して読む。
- ⑤後半だけを黙読する。
- ⑥言葉や句(フレーズ)を選ぶ。
- ⑦それを、三度、祈るような気持で、声に出す。
- ⑧時間が許す限り、その箇所を自由に味わう。
- ⑨「主の祈り」を祈って、終わる。

終わった後：聖書箇所を読んで分からなかったこと、疑問に湧いたことを調べる。

：調べてすぐに納得できなくても、いずれ分かる日が来る(マリアのように心に留めておく態度)という態度で臨む。

第7章 奉献文に親しむ

感謝の典礼

供え物の準備－奉納の歌と奉納行列－パンを供える祈り－ぶどう酒の準備－カリスを供える祈り－清め－奉納祈願

奉献文（感謝の祈り・第2奉献文が用いられることが多い）－叙唱前句－叙唱－感謝の賛歌－記念唱－栄唱－交わりの儀－主の祈り－副文－教会に平和を求める祈り－平和の挨拶－拝領前の信仰告白－拝領－拝領後の感謝－拝領祈願

・奉献文とはどの部分か？

「主は皆さんと共に」「またあなたと共に」という対話で始まる叙唱から、感謝の賛歌、と続いて「キリストによってキリストと共に・・・」という栄唱までを「奉献文」といいます。ミサの頂点とも言えるべき部分で、会衆の積極的な参加が期待される部分ですが、毎週大体同じなので「ここからはいつも通りか・・・」と気が緩みがちです。

・奉献文唱えられる時の信徒の役割

会衆がより積極的に参加するためには、「ここで共同体は何をしようとしているのか？」と考えるのがいいでしょう。どのように自分の役割を果たすかという点、**奉献文での会衆の行動は「思い起こす・記念する」ことが中心**です。聖霊の交わりの中で、**信じる共同体がキリストの死と復活という出来事を感謝を込めて「思い起こす」**ことで、ここに集まるわたしたちは**2千年前にパレスチナで起こった出来事に、時空を超えて与ることができます。そして、救いの力にも与ることができます。**

・御父に向かう祈り

「これはわたしの体、わたしの血の杯・・・」という聖体制定の部分の言葉は、うっかりしていると、司祭が会衆に向かって最後の晩餐の物語を語っているように聴いてしまいます。しかし、本当は、**司祭は御父に向かって「御子キリストはあの時、このように話し、このようになさいましたね。」**と思い起こしています。**会衆も、司祭と同じように、御父に向かって聖体を定めたときのことを思い起こしましょう。**

・奉献文について

奉献文は、ほとんど司祭が唱えるので会衆のひたすら聴く立場になるため、聴く時間が長く感じられ、集中力も失いがちです。しかし、とても大切な言葉がいくつもあります。奉献文に親しむことはミサを充実させる一つの方法です。

例：聖霊を求める祈り

まことに聖なる神、すべての聖性の源である父よ、いま、聖霊を注ぎ、この供えものを聖なるも

のとしてください。（第2 奉献文）

この祈りについてジェネル神父は『ミサ きょう きょうーミサがよくわかるために』ドン・ボスコ社 P150 の中でこう書いています。

今や、ある神秘が実現されようとしています。そこにはパンとぶどう酒があり、まもなく、食事の外観(しるし)は全くそのままでありながら、この食事を通して、生きておられるキリストがわたしたちに与えられるでしょう。この変化をもたらすのは、聖霊の力です。

国井健宏神父の『ミサーイエスを忘れないために』ドン・ボスコ社の P56～57 には次のように書いています。

ミサの中でもこの祈りは中心的な祈りです。聖霊の働きを求め、聖霊によって供え物が聖化されるように、と祈り求めます。同時にもっと大切なのは、聖霊によって共同体が、そこに参加している人たちが聖なる者とされるようにとも祈っているのです。エピクレシス(聖霊を求める祈り)には、この2つの意味合いがあります。

聖霊を求める祈りには、1) わたしたちが自分(これまでの人生、この1 週間にあった苦しみや悲しみ、喜びなど)を捧げる。2) 捧げものが自分自身ではどれだけ貧しく思えても神様は聖霊の力によってからず聖なるものに変えられる。このような、わたしたちと神様とのやり取りを通して信仰が深められ、新たに生きる勇気を与えられるのではないのでしょうか？

第8章 ミサで自分自身を捧げる

・自分自身を捧げる

ミサでは、キリストがご自分を捧げてくださるだけでなく、キリストの奉献に合わせて信者(教会)も自分自身を御父に捧げます。日常生活での出来事を捧げます。

「捧げる」とは、苦痛を耐え忍ぶことと考えるのではなく、自分の持っているもの、自分自身を神に一度預けてしまって、神の思いに従って使っていただくということです。

「捧げる」とは、①「自分に降りかかる苦難を寛大な心で耐え忍び、明るく生きていく」という意味合いと、②「神のみ心にかなう道を自分で選んで、その道を歩む」という意味合いがあります。どちらにしても、十字架を背負う道を歩むことになるでしょう。

*捧げることができる自分

それでは、自分を捧げる生き方を日常でするためには何が必要でしょうか？ まずは、毎週ミサで自分を捧げることです。毎週毎週のミサの中で、こまごまとしたことまで神様に委ねることができるようになっていけば、日常生活でも、自分を神様に捧げられるようになります。

主日のミサとミサとの間でも、自分を捧げる時間をもつことが大切です。例えば、一日を3つに区切って、朝・昼・晩と今日の出来事や労苦、その実りや失敗を神様に捧げます。 そうす

ることで、自分の頭の中でぐるぐる回っていたことが、不思議な力によって整理され、神様の思いに整えられ、余計な力が抜けて物事に当たれるようになることがあります。このような自由さはミサで自分を捧げる習慣から得られるのでしょうか。毎週のミサに忠実にあずかり、ミサを通して自分を捧げることで、次第に寛大で自由な心で行動できるようになります。

・キリストと共に捧げる

わたしたち人間は、自分の意気込みだけで自分を捧げることはなかなかできません。洗礼を受けた後も、根深い自己中心の心性はまだ残っています。ご自分を完全に捧げられたイエス・キリストと共にすることで、わたしたちも自分を捧げることができます。奉献文にもあるように、共同体はキリストの死と復活を思い起こし、その出来事の力に今ここで与ります。それがまさに、ミサでの完全な奉献です。奉献した後に、キリストに着いて行くのです。

国井健宏神父の『ミサーイエスを忘れないために』の中で、このように書いています。

イエスが御父へ過ぎ越していかれる動きの中で、(福音書の表現では、天は暗くなり、地は揺れ動き、死者も蘇るほどの鮮烈な動きの中で) イエスの後を追いかけるかのように、教会もその奉献を御父に捧げる。

第2 奉献文の場合

聖なる父よ、わたしたちはいま、主イエスの死と復活の記念を行い、み前であなたに奉仕できることに感謝し、いのちのパンと救いの杯を捧げます。

・供え物の準備

ミサ中、自分を捧げると言っても霊的な行為であって、目に見える行動には至りません。そのため、捧げ

ようとする心を準備する努力をすることになります。共同祈願が終わり、会衆は着席し、献金が集められます。祭壇では、感謝の典礼で用いられるパンとぶどう酒が用意されます。これが「供え物の準備」です。わたしたちは、供え物＝献金と考えがちですが、この「供え物の準備」をしている時間が、「自分自身」という捧げ物を準備する時間にしてはいかがでしょう。自分自身の体力、知力、家族、友人、仕事の労苦と成果、仕事先での人々を神様にお捧げするのです。そして、それらは皆、元をたどれば神様からのものであることにも意識を向けましょう。神様から託されている人々や物事を、また新たな気持ちで担えるようにとお捧げしましょう。

・献金と奉納

古代では、献金の代わりに自分で焼いた本物のパン、ぶどう酒、肉、魚、野菜、あるいは衣類や家具なども祭壇に奉納として運ばれていたそうです。それらは、貧しい人たちのために使われたのです。信者たちの汗と労苦の結晶を神様に捧げるということが目に見える形で行われていました。しかし、現在の教会でこれを実行することは難しいので、ホスチアとぶどう酒と献金だけになっています。これが、現代の教会の辛いところです。そこで「献金」のあり方に一工夫することを提案します。献金の時間にお財布の中からその時にあった適当なお金を献金するのではなく、ミサが始まる前に献金額を決めて、それをしっかりとした意思をもって献金されたらどうでしょ

うか。自分を捧げる意識をあらかじめ決めておいた額と一緒に捧げてはどうでしょうか？ そして、奉納行列で献金を子どもたちが祭壇に運ぶ時には、自分自身をも運ばれているのだという意識をもってはいかがでしょうか？ 奉納の時になると機械的に、聖歌の番号を確認して歌うようにマンネリ化しているのとすればこのような意識に転換することで、ミサが充実してくると思います。

・ご聖体

ミサで最も大切なことは、神様からの恵みです。個人として、共同体としてキリストに結ばれて、キリストに似た者に変えていただくことです。その恵みは、聖体拝領の時に最もはっきり現われます。司祭の「キリストの体」という言葉には「今あなたが受けるものはキリストの体ですよ」という意味の他に「これを受けるあなたもキリストの体になるですよ」という意味もあります。しかし、神の恵みをより豊かに受けるためには、人間もミサの中でなすべきことをしっかりしなければなりません。その一つが、奉献文の中で「自分自身を御父に捧げる」ことです。

聖イグナチオの自分を捧げる祈り

主よ、わたしの自由をあなたに捧げます。わたしの記憶、知恵、意志をみな受け入れてください。わたしのものはすべて、あなたからのものです。今、すべてをあなたに捧げ、み旨に委ねます。わたしに、あなたの愛と恵みを与えてください。わたしはそれだけで満たされます。それ以上何も望みません。

第9章 動作、姿勢、表情

・個人動作とミサ全体の関係

ある動作や姿勢がどういう内的態度に対応しているかは、文化や個人によって異なります。そのため、マスゲームのように会衆の動きを統制するべきではありません。しかし、一人ひとりが自分の動作や姿勢が全体に与える影響を意識することは大切でしょう。

ミサの基本姿勢は「立つ」ことです。それは、キリストの復活（立ち上がる）に与る人間の行為であるからです。もちろん、身体的な理由で人が座ることは何ら差し障りはありません。

「座る」のは、味わい思い巡らす姿勢です。第1朗読、答唱詩編、第2朗読、聖体拝領後の黙想の時間がその時です。一方、福音朗読で「立つ」のは、思い巡らすことよりも「キリストを迎える、出会う」ことを優先させるためです。

・姿勢について

「立つ」にしろ「座る」にしろ、背筋を伸ばすことを心掛けましょう。ミサ中の表情は、眉間にしわを寄せたり、目をつぶったままでいたり、腕を組む(コミュニケーションを拒絶している印象を与えるのでできれば避ける)のではなく、「神様、わたしはまたここに来ました。ここに来ることができてうれしです。」という気持ちが表に出るようにしましょう。もちろん、辛くて姿勢も屈み、暗い表情でしかいられない時もありますが、何となく堅い・暗い表情になっているようであれば改めましょう。

・目を開ける

私見ですがミサでは「目を開けている」のが基本だと考えています。閉じるべき理由があるときだけ目を閉じる。必ずしも見栄えのいい教会でないかもしれませんが、「これがわたしの教会」「わたしの兄弟姉妹」「わたしたちの司祭」だという意識をもつことも大切です。信仰が共同体的なものであることの表現です。信仰は「神様とわたし」だけのものではありません。もちろん、全体が沈黙している時間、説教の後、聖体拝領後は、静かに目を閉じ、いただいた恵みを味わうことは大切です。

・手の位置

座っている時なら、ひざの上にきちんと置けば、姿勢として決まります。立っている時は、合掌する(手の指をそろえて、胸の高い位置で合わせる)のがよいと思います。それに疲れるようでしたら、指を組むより手の平を合わせる形で手を組むのがいいでしょう。合掌するのは、「祈りましょう」ではじまる3つの祈願(集会、奉納、拝領)。それから、感謝の祈りから、主の祈りが始まる前。特に感謝の賛歌のあとの聖霊を求める祈りの部分。司祭が「まことにとうとく すべての聖性の源である父よ、いま聖霊によってこの供え物をとうといものにして下さい。・・・」(第2奉献文の場合)の部分はミサ中特に大切です。ホスチアがキリストの体に代わるだけでなく、私自身も神様に奉献し、聖なるものとされるようにと願いを込める意味でも合掌されてはいいがでしょう。また、自分でこの部分は合掌する、と決めておくのがいいでしょう。

第10章 信仰生活のサイクル

毎日の生活でわたしたちは疲れています。しかし、キリストのことを考えて「もう、一步だけ進んでみよう」と思い直すことも大切です。毎日でなくても、1週間のうち何度かそのようなチャレンジをしてみましょう。

・キリスト信者の生活のサイクル

キリスト信者の生活のサイクルは、“愛の業を含む霊的鍛錬”－“ミサ”－“心身の休息”－“愛の業を含む霊的鍛錬”－“ミサ”・・・でしょう。この繰り返しの中に、霊的・人格的成長、世の中への奉仕と証、ができると思います。霊魂のたくましさ柔軟性が身につきます。

・日常生活とミサ

日常の信仰生活・実務生活とミサを切り離してはいけません。ミサだけを切り離して考えると、芸術を論じるような審美的な見方になりがちです。

ミサを生活にどう位置づけるかには2つのアプローチがあります。

①「現実の生活にとって意味あるミサ」とする方法と②「ミサに与ることが意味を持つような生活」をしていくという方法です。日常生活においてキリストに従うために心身を労していなければ、ミサそのものをどんなに工夫しても、あまり深まらないでしょう。

また、生活のサイクルとしてミサをとらえた場合、一回のミサだけを取り上げてその良し悪しを言うのではなく、循環しつつ成長することを念頭にすべきでしょう。

深まった信者が集まればミサがよくなる－日常生活も深まる－ミサがよくなる－日常生活が深ま

る・・・。信仰共同体がよいサイクルを作って、ミサを育てていきたいものです。